

メディアアフィロソフィー

第四回〈管理する〉ということ

高田明典

得体の知れない不吉な塊が私の心を圧迫している。焦燥でもなく、嫌悪でもなく、酒を飲んだ翌日の二日酔いのようでもなく――。これはちよつと厭な感じだ。煙草の吸いすぎによる肺癌の可能性ではなく、運動不足と食べすぎによる高脂血症の可能性によるものでもなく、アルコールの摂取しすぎによる肝炎の可能性によるものもない^一。

「健康管理」の名のもとに、いろいろな人がいろいろなことを言う。歯医者に行けば歯肉炎を予防するために酒と煙草をやめろと言われ、定期健診では減量しろと言われる。やれメタボリック症候群だ、高血圧だ、高血糖だ……。煙草はからだに悪い、酒は適量がいい、肥満は病気のもと――知ってるよ。ま、みみっちく、そおつと生きていろ、という忠告なのだろう。

ヴェイユニは「肉体は現在の瞬間に生き、一方精神は時間を支配し自由に遍歴して時間に向づけを行う」ものだと指摘した^三。肉体に縛られるとき、人は「時間」に束縛され、自由を失う。もちろん肉体が朽ちたり機能しなくなったりすれば、精神もその機能を果たせなくなる。しかしながら、私たちは決して「肉体を生かす」ために存在して

一 梶井基次郎『檸檬』冒頭による。「えたいの知れない不吉な塊が私の心を始終^{おき}圧えつけていた。と言おうか、嫌悪と言おうか――酒を飲んだあとに宿酔^{ふつかよい}があるように、酒を毎日飲んでいると宿酔に相当した時期がやって来る。それが来たのだ。これはちよつといけなかった。結果した肺炎^{はいせん}カタルや神経衰弱がいけないのではない。また背を焼くような借金などがいけないのではない。いけないのはその不吉な塊だ。」

ニ シモーヌ・ヴェイユ (Wali Simone) 〈ヴェューユと表記されることもある〉。フランスの思想家・哲学者。『重力と恩寵』『自由と社会的抑圧』『神を待ちのぞむ』など。私が最も敬愛する哲学者。何かあればヴェイユに立ち戻り、ヴェイユならどう考えるかと思考する。ちなみに、レヴィIIストロースの『親族の基本構造』の「第14章 第1部補遺」において、婚姻規則の群論による解釈を行った数学者アンドレ・ヴェイユ(ブルバキのメンバー)は、シモーヌ・ヴェイユの兄。

三 オーギュスト・ドウトウーフへの手紙(二)『シモーヌ・ヴェューユ著作集1 戦争と革命への省察 初期評論集』(二七〇頁)。オーギュスト・ドウトウーフとは、ヴェイユが女工として働いていたアルストン電機の会長。ヴェイユは知人の紹介でオーギュスト・ドウトウーフと知り合い、彼の仲介によってアルストン電機のルクルブ工場で働くことになる。周知のとおり、当時ヴェイユはリゼの哲学教師であったが、労働運動への関心から、休職して過酷な労働の現場に入り、その体験をもとに自らの思想を研ぎ澄ませていった。

いるわけではない。デカルト的かつオカルト的^四な心身二元論に立ち戻るつもりは毛頭ないが、論理や情報という「物質とは異なる性質を持つ現象」が存在するのは、少なくともそれを「現象」としてとらえる限りは事実であると考えなければならぬだろう——この主張に少し自信がないのも事実だが^五。

自動車は「メンテナンスするため」に保有されているわけではない。自動車はその「機能」によって存在している。自動車をメンテナンスするのは、それを使ってどこかに移動するときに困らないようにするためだ。走っていればどこかに不調が生じることはある。もちろんそれに対処する必要はあるが、どうしようもない使用劣化などは受容しなくてはならない。自動車を「完全な状態」で保持するために「走らない」というのであれば、それは本末転倒した行為である。さらに言えば、メンテナンスはむしろ「無理をきかせる」ためにこそ行われる。人生だって同じはず。

「日本人の四人に一人は高血圧症」で「日本人の四人に一人はメタボリック症候群^六」だということらしい。たぶん私もその両方の「病氣」の患者だも。これらは、ほとんど自覚症状がない「病氣」なのだという。で、日本人の平均寿命って何歳だっけ。七〇歳や八〇歳まで生きる人は「健康」であるはずだろうに——それって本当に「病氣」なの？ もしもそれらが病氣だというのであれば、日本人の大半は病氣であるにも関わらず、その大半が八〇歳以上まで生き続けるということになる。じゃ、「病氣」って何さ。

病氣というのは、(少なくとも)それにかかることによって困った状態になるということであるはずだ。「可能性」をもとに病氣だと診断することが可能なのであれば、人は成人した瞬間に「老衰」という病氣にかかっているということになる。誰もがいつかは必ず老いて死ぬわけだから。「困ったことになる」という「可能性」にまで範囲を広げ

^四 ルネ・デカルト (Descartes, René)。オカルト (Occult) は「神秘学」とも訳される。「理性」によっては捕捉しえない隠されたものがある」とする考え方。「デカルト的／オカルト的」と韻を踏んでみただけで、デカルトは決してオカルト的ではない。

^五 教師に質問されて困っている小学生ではないが「考え中」。結構面倒な問題であると思われる。量子論物理学者であるシュレディンガーの『精神と物質』はたいへん参考になる。もちろん、物理学者だけではなく(というよりもむしろ)多くの哲学者がこの問題に取り組んでいる。

^六 症候群 (Syndrome)。「症状群」と訳されることもあるようだが、その区別については不勉強なので不明。厳密に言えば、これは「病氣」ではないということになるが、「ギランバレー」症候群や「シックハウス症候群」のように、明らかに「病氣」に分類されるものも多い。何らかの異常が観察され、それが特定の病因に結びついているとは言えないものの、共通の「病的因子」によって惹起されていると想定されるときに(かつそれが何だかわからないとき)に、それらの「症状」を束ねて「症候群」と呼ぶらしい(この記述に自信なし)。端的に言う「病氣の前段階っぽい」もしくは「病氣だと思っけど原因不明」ということになり、かなり曖昧な概念。大丈夫か、医学。

てそれを病気だというのであれば、生まれたこと自体が既に病気だ。

アガンベン^八は、生(vita)を、ギリシヤ人に倣ってゾーエー(zoe)とビオス(bios)に分けて考える。ゾーエーとは、いわゆる「生命」のことで、「生きている」というたんなる事実を表現するものであり、それに対して「ビオス」とは「生の形式ないし生き方を意味」するものだという。もちろん「健康管理」とは生き続けるためのものであり、ゾーエーを管理することの別称である。それは「自主管理」を中心とするはずのものであつた。この「管理」に、外部からの手が入るようになったのが近代の一つの特徴である。とフーコー^九は指摘する。

王権的支配における「権力」とは、「殺すこともできるのに、殺さない」ことを基礎としていた。臣民の生殺与奪の権利は王の手に委ねられ、王は「慈悲」によつて「殺さない」ことを選択することもできる。「殺されなかった」臣民は、王に感謝さえし、忠誠を誓うという仕組みだ。しかし近代になつて、この「剥き出しの権力」は影を潜めるようになった。それは「剥き出しの権力」においては、臣民の反抗の対象が明確であり、「篡奪」や「奪権力」を行うことが可能であつたことにも由来するとされる。

そこで「権力を握る者達」は、より巧妙な方法を考案した。それがフーコーの指摘する「生」権力(bio-power)である。そこにおいては「生かすことができないのに、生かすことが企図される。「生かさず、殺さず」ではなく、「ビオスとしてもゾーエーとしても生かすことはできない」^{一〇}のに、ゾーエーとして生かすことを考える」^二。社会的な「生」としては意味を持たせないままに、「単なる生命体」として生き延びさせる。フーコーはそれを『性の歴史Ⅰ 知への意志』において、こう表現している——「死なせるか生きるままにしておくという古い権利に代わつて、生きさせるか死の中へ

八 ジョルジョ・アガンベン (Agamben, Giorgio)。

九 ミッシェル・フーコー (Foucault, Michel)。本人は否定していたようだが、ポスト構造主義に分類される哲学者。『言葉と物』『知の考古学』など。

一〇 「社会的に生きる」とは、社会の中で、ある役割を与えられることである。労働者・生産者として、または収奪者や搾取者として、もしくは管理者や為政者として。どのような立場でも構わないが、社会の中で何らかの機能を担うことが「ビオスとしての」生のありかたである。そのとき「機能」とは、自らの意志によつて社会に何がしかの影響を行使することと同義である。しかしながら、現代の社会は、個人が社会に対して「力」を行使できないようにシステムを構築してきた。その結果、たとえ高級官僚や国会議員であつても何も有効なことではできず、「社会的に生きる」ことが難しくなつていく。ましてや一般市民であれば、その「機能」は、ほぼ存在しないに等しい。選挙？ 本当にそれが「機能」していると思つていますか？

一一 「ビオスとして生かす」社会的に生かすつまり「社会において何らかの役割を担わせる」ことができる(もしくは積極的にならうしない)ので、ゾーエーとして(単なる生物として)生かすことに中心がおかれるようになるということだが、ここに「権力」を発生させようとしている人たちがいる、ということ。

たことが起こる」ことを前提としている。

人口動態や出生率や死亡率を調査し、それを制御すべく管理するための手法の集合を「ブイコー」は「生—政治 (bio—politics)」と呼んだ。ゾーエーとして「生き延びさせる」ことを目論む手法だ。そして生—政治の真骨頂は、その視点や価値観を個人の内部に醸成するところにある^{一六}。「健康こそが最優先の課題」「命こそが守るべきもの」だと多くの国民が考えるとき、そこに「生—権力」が発生する。そしてこの力は、前述のように「ほうっておけば死ぬ」という認識の存在を前提としている。つまり「ほうっておけば死ぬ」ということをどこかでうまく演出しないと、この「管理」はうまくいかないということ^{一七}。

最近、戦争の準備をするための法律が成立した。「国民投票法^{一七}」のことだ——どんなに言い繕っても、これは「戦争準備法」だろ？(違うなら明確に違うと言って欲しい)。「交戦国の兵士だから」殺してもよいという基準は、簡単にその線引きを後退^{一八}させる。国民の生命を守るという目的のもとで戦争を許容する国家は、おそろしくいつかは国民の中でも「生かす者」と「生かさぬ者」を選別するようになる^{一九}。「戦争」とは本質的にそのような性質を持っている。かつての日本軍がそうだったように——日本軍だけではなく、多くの軍隊においてそのような線引きは現実のものだったではないか^{二〇}。その「線引き」の権利を誰かに委ねた瞬間に、それを覚悟しなくてはならない。だから、

ば「神奈川県公共的施設における受動喫煙防止条例」とか。これによって、私の勤務する大学(フェリス女学院大学)では、個人研究室も「禁煙」となった(県に問い合わせ、そう決めた)。横浜国大や慶応大学とかも同じらしい。反対した人がいなかったのが不思議だ。ま、県知事がブイコーとか知ってるはずもないだろうが、横浜国大とか慶応には、ちゃんとした学者もいるだろうに。別にこれまでも吸ってなかったから(私は自宅の自室以外では煙草を吸わないので)、どうでもいいけど、(思想的に)不愉快なこと極まりない。でも結局反対とかしないんだよね。ここでみじめに遠吠えするだけ。

一六 いわゆる「パノプティコン(一望監視装置)」の議論と同じ論法(監視される側の内部に、監視する視点が発生する)で、「生命こそが」「健康こそが」大事であるという価値観が、私たちの内部に発生すると説明する。

一七 「日本国憲法の改正手続に関する法律」。二〇〇七年五月十四日に可決成立し、同年五月十八日公布、三年後の二〇一〇年五月十八日に施行された。みなさん知ってますか？ 結構大事な法律ですよ。

一八 「前進」とも言う。次第に「非国民は……」となり、さらに「非戦闘員は戦闘の邪魔になるので……」と考えるようにもなる。まさに本末転倒。

一九 たとえばナチスドイツのように。こういう扇情的な事例の提示は好ましくもないと思うが、この事情に関しては、アガンベンの『アウシュビッツの残りのもの』に詳しい。

二〇 戦争が醜い理由の一つは、そこに「誰を殺してよいか」という判断が必ず存在するからである。

戦争であれ死刑であれ「命を奪う権利」を他者に委ねるべきではない^三。それは「私」をさえ「生かさなない側」に追いやる行為だから。

一般市民の生命を守るために兵士の生命を犠牲にしてもよいというレベルの話ではない^三。最終的には「少数の人間を守るために、他のすべての人間を殺す」ことにさえなる。一九四五年に沖繩で発生した多くの悲惨な事件を「事実ではなかった」と言い繕おうとしている動きと、「国民投票法」の成立に向けての動きが同期していたのは偶然ではないと感じる——奴らは十分に賢いぞ。

「管理」とは、そのような側面を持つている。そして「戦争」を基軸とする管理は、「生—政治」のゆがんだ完成形である。「生—政治」は人が死ぬことを前提とした管理であるにも関わらず、現代の日本では「人が死ななくなつた」——死は日常空間から隔離され巧妙に隠蔽された。生の管理があまりにもうまくいきすぎたおかげで、「管理を必要とする理由」である「死」の存在が希薄になつてしまつた^三。彼らはこの種の嗅覚に長けている。「管理」のためには、死の表象が必須であることをよく知っている。「自分が死ぬ可能性」もしくは「自分が殺される可能性」がなければ「生—政治」は機能しない。テロ、戦争、犯罪、事故——管理する側はそのような「脅し文句」を巧妙に使いながら、私たちの頭の中に「死」の表象を埋め込もうとする——ほうつておけば死ぬぞ／殺されるぞ、(国が)きちんと管理しないと死ぬぞ／殺されるぞ、と。「メタボリック」など、むしろ可愛い部類だ。

いや、確かに管理は必要だ^{二四}。だから、管理する人たちが悪人だと主張しているわけだが、当然、「死の判定」を医師に委ねるべきでもない。「この人は死んでいます」と、どういう「権利」「権限」のもとで言えるのか、私にはまったく理解できない。それを受け入れるのは「生と死の線引き」を他者に委ねることに等しい。かつては、医師は「死の時刻」を判定することだけをしていたのであつて、「死」そのものを判定していたわけではない。

三三 兵士も国民であるわけだから、兵士だけが死んでよいはずはない。兵士が国のために死んでよいならば、非戦闘員である国民だつて国のために死んでも構わないはずだ——こういう考え方が怖いね。戦争の最末期には、どの国でもそんな感じになる。本末転倒とはこのことだ。でも、戦争に負けたとしても、国民が全員死ぬわけではない。この百年ぐらいの事例では管理者が変わるだけだつた。では、誰のための戦争なんだろう。

三三 実のところ、若年層においては「死の表象」は深く広く蔓延している。アニメやコミックやライトノベル・携帯小説を分析すると、必ずと言っていいほど「生—死」という対立軸が抽出される。

二四 この社会は、何らかの管理がなくてはその基本的機能をえ維持することができない。日本語での「自由」は、英語では Liberty と Freedom に分かれるが、Liberty とは、ある規範の内部における自由のことを指し、Freedom とは本来的かつ野放図な自由を指している。実現はしなかったが、ポストモダン建築のダニエル・リベスキンド (Libeskind, Daniel) が 9.11 の跡地 (グラウンド・ゼロ) に建築しようとしたのは「Freedom Tower」だつた。ちなみに「自由の女神」は「Statue of Liberty」であり、湾岸戦争「イラク解放作戦」は「Operation Iraqi Freedom」だつた。Liberty は管理のもとにしか存在しえないが、私たちが求めているものが、Liberty なのか Freedom なのかを考える必要がある。

けではない。しかし必要な管理とは、テロが起こらないようにすることであり、テロが起こるぞと脅すことではない——戦争が起こらないようにすることであり、戦争が起こったらどうすると問いかけることではない——病気になるらないようにすることであり、病気になるぞと脅すことではない。ましてや、病気でテロでも犯罪でも戦争でも、その「可能性」をいたずらに喧伝して、管理のネタを生み出すことでは決してないはずだ。「平和ボケ」という陳腐な常套句を使って何かを主張した気になっている「代表者」など、いらぬ。必要な「管理」をしてくれよ——きちんとやっていると思ってるからこそ、「権限」を委ねているのだから。

私がかもどかしいと思うのは、本稿で指摘しているような内容が、結局のところ「それを本当に必要としている人たち」には届かないことである。それは、本稿の読者の多くが、むしろ「管理する側」権力者」もしくはその予備軍および周辺に属する人たちであることを言っている^{二五}。本稿のような内容を「理解しうる」ということ自体が「管理する側」権力者」の近くに位置していることの証左である場合が多い。かくして「管理する側」により多くの知識と情報が集積されることになる——困ったもんだ^{二六}。

そんなことを言う私自身、管理する側・生——政治の側・生——権力を行使する側に極めて近い人間であるといえるかも知れない^{二七}。なんとも世の中はうまくいかないものだ——「よくできているものだ」といふべきか。結局「管理」とは、情報の偏りもしくは淀みによって実現されるのだということ。多く知っている者が、少なくとも知らない者を管理する。だから役人は情報を出ししどる。

管理する側によって、病気も死も統計的に処理される^{二八}。しかしその統計の数字で示される個々の人間を考えてみれば、いろいろな「生の形式」を背負った人たちの生き様がそこにある。そのそれぞれの「生の形式」を捨象して一個の「命」として扱

^{二五} あなたのことです。こういう文章を読んでいるということ自体が、すでに「管理者」「権力者」もしくはその予備軍であることの証明だから。

^{二六} つまり、本当は、この文章は、本来こういう文章にまったく触れる機会のない人たち（たとえばサッカーの試合を一生懸命見ている人たち）に読まれ、理解されるべきなのだが……。

^{二七} 大学に所属する研究者は本来権力とは距離を置いた場所に存在しているべきであるが、書物を著し、マスコミなどに聞かれれば何がしかの意見を言い、学会で役職を担っていたりもする以上、ちっぽけなものではあれ、権力を行使する側に位置していると考えべき。そういう自覚を持っていないと、すぐに腐敗する。恩師の三島二郎先生は、「学者は資本介入すべきではない」と常々言っておられた。もちろん権力にも。それは、学者・研究者とは「正しさ」だけを追求する者たちでなければならないからだ。しかし今は、金と権力の世界に介入したい学者が増えすぎている。なら学者になんかならなければいいのにね。

^{二八} 様々な「死のかたち」があるはずなのに、それらをすべて一つの死ととらえるのが、統計である。計数（カウントすること）の利点は、その捨象性にある。

うというやりかたは一見美しく見えるが^{二九}、その実、とても醜い隠された動機に裏打ちされている。問題は、「管理する側」さえその動機に気付いていないということ。

ワイトゲンシュタインは「人は死を体験することはできない」「われらの生に終わりはない」と言う——「もしも、永遠とは限らない時間持続ではなしに無時間性のことである、と考えるなら、現在のうちに生きている人は永遠に生きていることになる。

三〇「ヴェイユの指摘と同じだ——私たちは時間を支配しうる。生——政治はその邪魔をする。

「生」は、学校での行進練習のように病弱でそれに堪えることのできない人間をその行進から除外してくれるものではなく、最後の死のゴールの直前まではどんな豪傑でも弱虫でもみんな同列に並ばせて否応なしに引きずって行く。だからこそ、自分の生の形式は自分で決めなければならない^{三一}——時間を支配し、魂の自由を確保するため^{三二}。

(初出 『文學界』二〇〇七年七月号)

二九 「みんな同じ人間じゃないか」「みんな同じ生命体じゃないか」というのは、端的にウソである。同じはずがない。同一性の問題は哲学のアポリア(難問)だが、基本的には規約的に判定されるものではない。1秒前の鉄球と1秒後の鉄球を「同じ」だとするのは規約的判断である。原子レベルで考えるならば(たとえば原子核の崩壊などを考慮に入れるならば)、同じではないとすることも可能。つまり、同一性とは、その前提となる「何を以って同じであるとするか」という思考なくしては、判定できない。

三〇 『論理哲学論考』6:4311。

三一 もちろん、死の形式も。

三三 梶井基次郎『のんきな患者』末尾による。「しかし病気というものは決して学校の行軍のように弱いそれに堪えることのできない人間をその行軍から除外してくれるものではなく、最後の死のゴールへ行くまではどんな豪傑でも弱虫でもみんな同列にならばして^{いやわっ}嫌応なしに引き摺^ずってゆく——とこういうことであつた。」